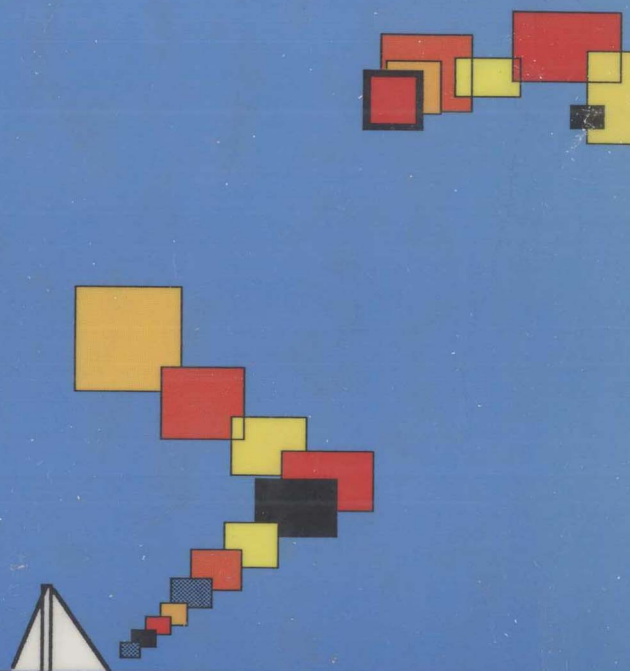


解説

PART1 PART2 PART3 PART4 本多勝一

太平洋ひとりぼっち

堀江謙一

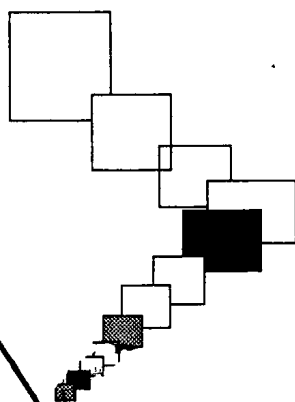
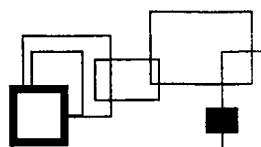
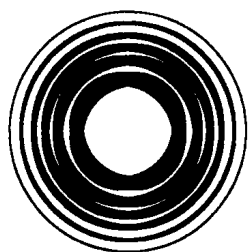


解説

PART1 PART2 PART3 PART4 本多勝一

太平洋ひとりぼっち

堀江謙一



堀江 謙一（ほりえ・けんいち）

一九三八年（昭和十三年）、大阪に生まれる。一九五四年（昭和二十九年）、関西大学第一高等学校入学。同校ヨット部入部。一九六二年（昭和三十七年）、世界初、単独太平洋横断に成功。一九六三年（昭和三十八年）、第十回菊池寛賞受賞。一九六四年（昭和三十九年）、イタリヤにて、海の勇者賞受賞。一九七四年（昭和四十九年）、小艇による単独無寄港、世界一周に成功。一九八五年（昭和六十年）世界初、ソーラパネル利用のソーラボートにて、太平洋横断に成功。著書『太平洋ひとりぼっち』（角川書店）『世界一周ひとりぼっち』（立風書房）『妻との最後の冒険』『太陽で走った』（朝日新聞社）

本多 勝一（ほんだ・かついち）

一九三三年信州・伊那谷生まれ。現在、新聞記者。著書『ベトナムはどうなっているのか？』『カンボジアの旅』（朝日新聞社）ほか多数。

ぐるーぶ・ばあめの本 地球時代選書 1

太平洋ひとりぼっち 定価一八〇〇円

発行 □一九八九年八月二〇日

著者 □堀江 謙一

編集 □株式会社 ぐるーぶ・ばあめ黒姫支社

発行者 □磯貝 浩

発行所 □株式会社 ぐるーぶ・ばあめ

郵便番号 一〇六

東京都港区西麻布一三二二 ばあめ ANNEXAL

電話番号 (〇三) 四八六一九九一

発売所 □芹澤真吾

発売所 □株式会社 清水弘文堂

郵便番号 一〇一

東京都十代田区猿樂町一四一

電話番号 (〇三) 二九三一九七〇八

郵便振替 東京八〇二二二

印刷所 □世田印刷

製本所 □ナシヨナル製本

□乱・落・本はおとりかえいたします□

●太平洋ひとりぼっち

堀江謙一 ●

「そこに太平洋があるから……」

「わたりたいから わたった」

なん百回……いや、ひょっとすると、なん千回かもしれない。あれ以来、ぼくはどんなに、おんなじ質問ばかり、くりかえされたことだろう。

人は口を開けば、きまって、

「きみが太平洋をわたった動機は？……理由は？……目的は？」
と、まずこうきた。

プロの評論家や新聞記者もそうだった。ゆきずりに顔を合わせた連中も、かならずそれをいった。みんな、ぼくから、なにか特別の「お話」でも引き出せるつमりの顔つきをしていた。

ぼくは、そのたんびに弱ってしまった。これといって、いうことがないものだから、
「わたりたいから、わたったんですよ」

正直に本音を吐いた。これで、ぜんぶなのだ。動機も、目的も、すべては太平洋をわたることズバリにつきる。

しかし、このいちばん切実な気持ちを「なるほど」と、飲みこんでくれる人は、ひとりもいなかった。かならず、

「そういえば、そうだろうが、しかし、小さなヨットで単身、太平洋を横断するについては、なにか、とくに……」

追いうちをかけてきて、リクツみたいなことを、いわせようとした。ぼくがうまく説明できないでいると、自分なりの解釈を持ち出して、それにコジつけたがる人たちも多かった。

「わたりたいから、わたった」

こんな単純な気分が、どうしてわからないんだろうと、ぼくはふしぎだった。だから、一生懸命に、納得してもらおうとつとめたが、ダメだった。そのうち、バカバカしくなった。それから、腹が立った。

プンプンして帰ってくると、ヨット仲間たちは愉快だった。同情する人もいた。いっしょに憤慨してくれる友だちもあった。しかし、ヨット仲間は異口同音に、こう言った。

「ワカッチャイネエンダナア。こんなあたりまえのことが、ねえ」

我々の仲間では、あたりまえのことなのだ。ヨットをやる人間なら、だれだって、一度は太平洋をセーリング（帆走）してわたりたいと、ほんきで夢を見る。

質問する人たちのお気に入るような、立派な理由は、お答えできない。でも、こんな気持は、ヨットをやらない人には、通じないのかもしれない。

ヨット人口の多いサンフランシスコでさえ、やっぱり、ちがわなかった。集中された質問は、「なぜ？」であった。あのときも、ぼくはおなじことを答えた。

「わたりたいから」

すると、通訳の人が、

「パシフィック・オーシャン、なんとか、なんとか」

それを聞いて、記者団のひとりが、皮肉そうな口つきでいった。

「じゃ、きみは、これからアメリカ大陸をわたるつもりかい？」

なんのことやら、ぼくにはさっぱりわからなかった。あとで知ったのだが、そのとき、通訳さんがこう訳していたんだ。

「そこに太平洋があるから……」

おかげで、大陸がどうのこうのと、意地の悪いことをいわれたのである。

ぼくは、そんなキザな文句をいいはしなかった。だいいち、二番せんじということが、ぼくの性に合わない。いくら、ヒマラヤ登山で有名なマローリーの名文句でも、貸し衣裳はごめんだ。

この話をする、なかには、

「名通訳やないか。うまいこと訳しとる。怒ることないやろ」

ぼくの意地ッ張りを笑うオトナもいた。でも、この機会にハッキリいわせてもらいたい。「太平洋があるから」なんて、齒の浮くような発言はしなかった。

ぼくが末席につらなっている（NORC）（日本オーシャン・レーシング・クラブ）には、五百人からの先輩がおられる。そのだれにでも、聞いてくれるといい。

「あんた、ヨットで太平洋をわたりたいですか？」

五百人とも、即座に、おなじ答をするにきまっている。

「むろんですよ」

「なぜ？」

「あたりまえじゃないですか」

二〇年以上も、そのことばかり考えてきた先輩もいる。着々と計画を進めて、手ぐすねひいていた人も、なん人が知っている。たまたま、ぼくが先を越させて頂いたまでである。日本が面している外海は太平洋だ。遠くまでクルージングするとなれば、太平洋横断というケースになる。どうしても、そこへ考えがいつてしまう。そこにあるからわたりたくなるのではない。大きいヨットイングをしようとする、結局は、太平洋をわたるようになるだけだ。太平洋を征服するのが目的ではなく、主体はセーリングである。

ただ、こういうことはいえる。七つの海のなかで、太平洋はいちばん広い。しかも、シングルのハンド（単独）でわたった日本人はいない。白人の記録ばかりだ。よし、やってやろう。ぼくにも、最高位をねらおうとする功名心みたいなものはあった。

せいぜい五〇メートルが泳げる限度だった

ぼくは、生まれつき海好きだった、となにかに書いてあったが、そんな大げさなことはない。

「そこに太平洋があるから……」

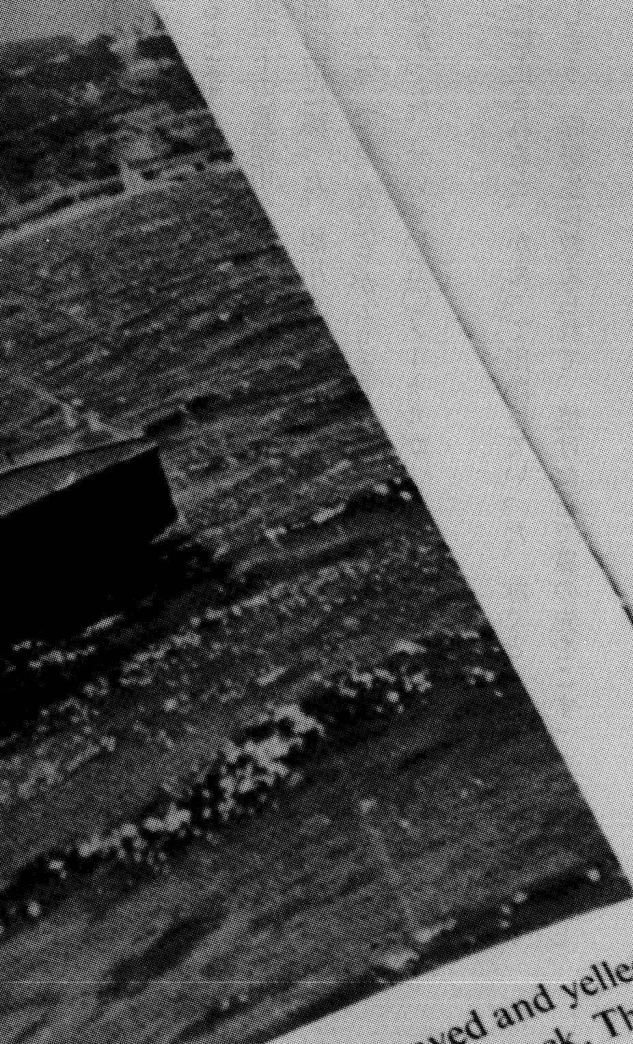
昭和一三年の九月八日、ぼくは自動車部品商の長男として、大阪市港区東田中町で生まれた。港区だから海には近い。幼児時代にも、一人前に水遊びはした。時には、海にはまっつて、バレるとまづいので、服を乾かしてから帰ったことぐらいはある。

一九年に、大阪府下の箕面市へ疎開した。水とは縁が切れた。二〇年、小学一年のとき、母の実家がある岡山市に移った。旭川という河が、市中を流れていたもので、友だちに誘われては、泳ぎにいった。でも、友だちがムリをして、ヘトヘトに疲れるまで泳ぐのには、つきあう気になれなかった。せいぜい五〇メートルが、泳げる限度だった。いまだって、そんなところだ。

それでも、親に禁止されると、かえって出かけていった。泳ぐと、鼻の頭が光る。これでは、わかってしまう。同級生に教えられて、焼けた石で鼻の先をこすって、照りを消したこともある。

三年いて、大阪へもどった。小学校のななめむかいに、運河があった。写生の時間に、先生が用事で教員室に帰った。そのすきに泳いで、ごつう怒られた。そんなに泳ぎたかったわけではない。ただの茶目気だった。

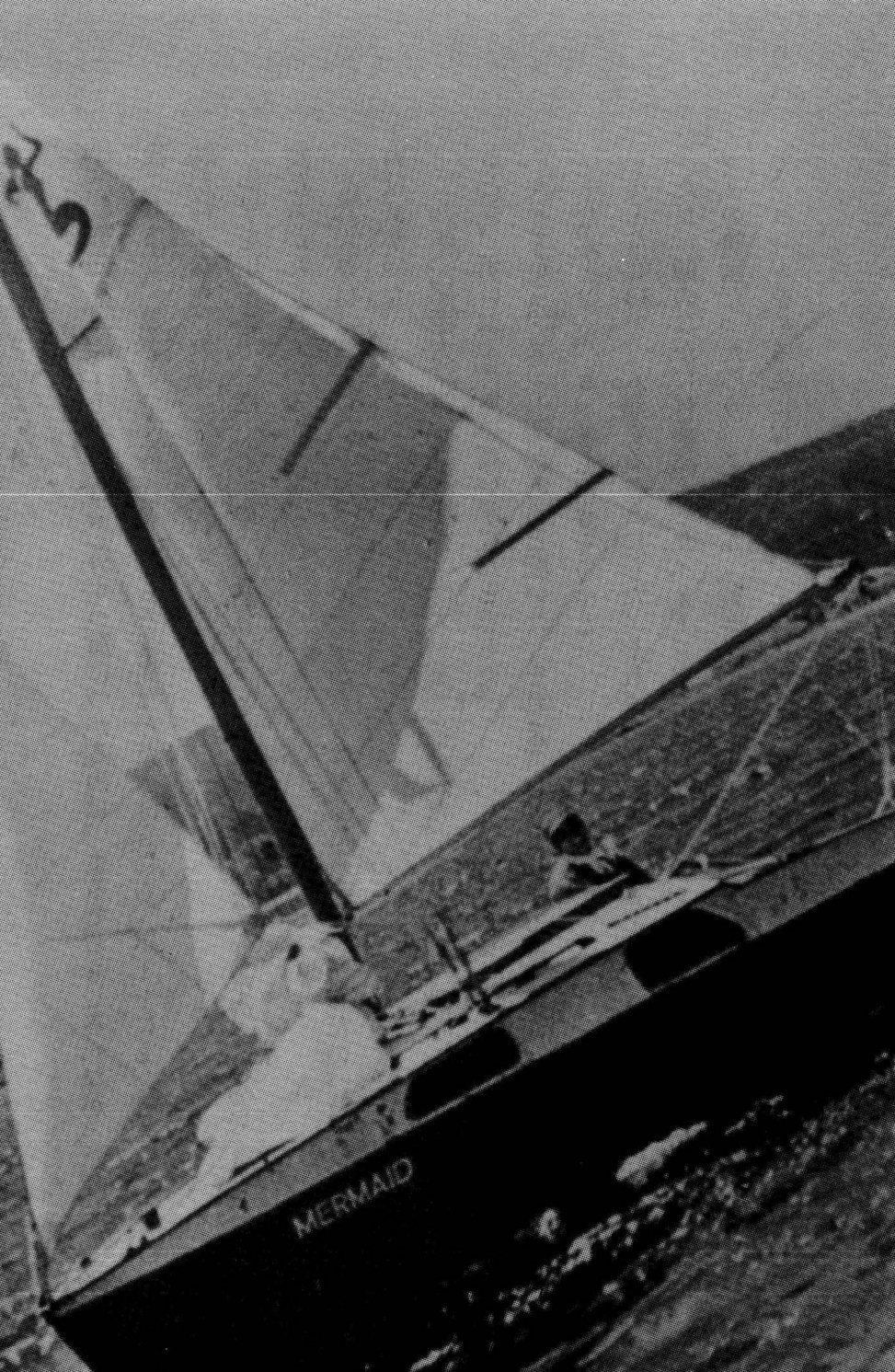
二六年、家の近くの八阪中学に入った。夏休みに、甲子園で臨海学校が開かれた。ピッ



此方

kipper waved and yelled:
I called back. There
HARRY JACOBS.

metropol
The next year,
again—this ti
parents wer
the middle
my scho
swimm
exha
my
sh



ピツと笛を合図に、キッチリ二〇分ずつ海につかるのは、まるでおもしろくなかった。午後になると、波がきつくなつて、むしろ苦痛だった。泳ぎにも、ボートにも、ぜんぜん興味が持てなかった。

中学を出るまで、ぼくと水のつながりは、そのぐらいしかない。水のそばへいくのは、友だちがたくさんいるからだだった。

それよりは、鉄棒にこった。二年の後半から、体操部に入った。からだのバランスと握力はよかった。

二九年、関西大学第一高等学校（関大一高）に進んだ。これという理由もない。入学するとき、ずいぶん月謝の高い学校だと感じた。

入ってから、ヨット部があると聞いた。それまでは、なんにも知らなかった。

——なんとなく、ヨットもよさそうやな。

そんな気持で、入部することにした。それまではヨットにさわったことさえなかった。ただ、頭のなかには漠然としたイメージがあった。映画のシーンで、たぶん、オリンピックの映画だったろう。レーサー（競走用のヨット）が走っていた。部があると教えられて、ヨットをやる気になったのは、そのイメージのせいだとおもう。

入部して、あきれた。すごく封建的だった。大学とつづいているので、練習は大学生がコーチをする。大学の高学年とホヤホヤの高校一年とでは、年齢が六つも七つもちがっていた。

合宿ともなると、ムチャクチャだ。ヨットに乗っているのが、タップリー〇時間である。その前の準備と後の整備が、それぞれ一時間はかかった。途中で、一時間だけ休ませてもらった。これで合計一三時間。

勉強もしなくてはならなかった。寝るのは、バラックみたいところで雑居だ。いつも、からだがぬれていた。頭は痛みっぱなしだった。疲れてタルむと、水をぶっかけられた。

合宿がすんで、家に帰ってから数日は、飯を食うとき以外、ずっと眠りつづけた。日に二〇時間以上だ。おフクロが心配したが、ただの過労と知ると、こんどはむしろ、感心されたものだった。

夏休みは、三日しか家へ帰れなかった。

—なんで、こないにハード・トレーニングせんなんのやろ？　もっと合理的な練習法はないんかいな？

まじめに、そんなことを考えた。やりかたへの抵抗ははげしかった。

入部して、一か月がすぎた。気がついたら、いっしょに入った一年生は、ひとりしか残っていなかった。三〇人近くいたのに、ぼくだけだ。このとき、

—オレはやめへんぞ。

猛然とファイトがわいた。練習は、相変わらずイヤだった。ヨットも好きになれない。しかし、こうなったからには、もう後には引けなかった。卒業までやることにした。意地である。

そう決心したら、少し楽になった。先輩たちも、新入生が全滅しては困るとおもって、いくらか大事にしてくれたのかもしれない。

それでもぼくたち関大一高のヨット部は……

練習は、西宮のハーバーでやった。ちょっとAディンギー（いちばん小さくて、初心者むきのヨット）に乗ってあとはスナイプ（艇のクラス名）だった。

スナイプは二人乗りだ。ひとりがスキッパー（艇長）で、もうひとりがクルー（乗組員）になる。もちろん、ぼくはクルーである。たったひとりの一年生だから、いちばんの下端。しかたがない。

――朝から晩まで、こんなことしてて、なんになるんやろ？
何回も頭をひねった。でも、スナイプはよく走った。

――風だけしか動力がないわりには、よう走るもんや。
バカげたことに感嘆したのを、覚えている。

メガホンで怒鳴られ、怒鳴られ、二年生になった。ヤレヤレとおもったが、また一年生とコミにされた。ティラー（舵棒）は握らせてもらえない。肝心のセーリングなんか、教わるどころではなかった。

スキッパーはメイン・セール（主帆）をあつかう。これだと、シート（引き綱）がダブルになっているから、操作は軽い。クルーの担当はジブ（前帆）である。シートは一本の綱だ。これをつねにゆるめないように、全力でひっぱる。生ハンカ握りかたでは、しめきれない。きつくつかんだまま、からだでバランスをとりながら走らせる。

掌の皮がむけた。むけたあとの赤肌が、さらに千切れた。そんな手でシートを握りつづ

けていると、いざ離そうとしても、掌がひらかなかった。からだは四六時中、ズクズクにぬれていた。

やっと、ティラーにさわらせてもらったのは、二年も終りになってからだだった。卒業が近づくと、三年生は引退する。トコロテンで主将になった。

しかし、二年間もクルー専門にやられたのは、うんと役にたった。ずいぶんたくさんスキッパーと組んだ。いつの間にか、ステアリング（操舵）のうまいへたが、わかっていた。基礎も身についた。

こっちがフーフーやっていると、横を、大学生たちが大きな艇に乗って、クルージング（航海）に出かけていく。先輩がなにをしようと、いちいち後輩にことわる必要はない。スイスイ走っていくのを見ると、無断でおいてきぼりを食わされた感じだった。

——勝手に、ええことしよる。

恨めしかった。

つまり、大きいボートに乗って、遠くへいきたい希望がくすぶっていた。それは、ボンヤリとだけれど、太平洋につながっていた。とくに、ぼくだけの感じではないんだ。強弱の差はあっても、みな、思いはひとつだった。